

## 二〇六 南條殿御返事

はる(春)のはじめの御つかひ、自他申こめまいらせ候。さては給はるところのすずの物の事、もちる(餅)七十まいさけひとつ(酒一筒)いも(芋)いちだ・河のりひとかみぶくろ(一紙袋)だいこんふたつ・やまのいも七ほん等也。ねんごろの御心ざしはしなじなものにあらはれ候ぬ。法華經の第八卷云、所願不虛亦於現世得其福報。又云、當於現世得現果報等云云。天台大師云、天子一言不虛。又云、法王不虛等云云。賢王となりぬればたとひ身をほろぼすともそら事せず。いわうや釋迦如來は普明王とおはせし時は、はんそく(班足)王のたて(館)へ入せ給き。不妄語戒を持せ給しゆへ也。かり(迦梨)王とおはせし時は、實語少人大妄語入地獄とこそおはせありしか。いわうや法華經と申は、佛、我と要當說眞實とならせ給し上、多寶佛十方の諸佛あつまらせ給て、日月衆星のならばせ給がごとくに候しざせき(座席)也。法華經にそら事あるならば、なに事をか人信べき。かゝる御經に一華一香をも供養する人は、過去に十萬億の佛を供養する人也。又釋迦如來の末法に世のみだれたらん時、王臣萬民心を一に

【承年】 應治二年正月十九日(55) 【寫】 興師本 富士大石寺藏 【刊】 内 35<sub>36</sub> 遺 20<sub>40</sub> 縮 1374

【註】 健 25<sub>18</sub> 啓 35<sub>32</sub> 拾 7<sub>65</sub> 扶 14<sub>52</sub>

① ほん=本(興) ② す=せ(興) ③ 華=花(興)